



中学校音楽科における能の授業☒ —
音楽文化の理解と継承を目指した授業実践の可能性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 紗織, 齊藤, 貴文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007107

中学校音楽科における能の授業(2)

— 音楽文化の理解と継承を目指した授業実践の可能性 —

中西 紗織・齊藤 貴文*

北海道教育大学釧路校音楽研究室

*北海道教育大学附属釧路義務教育学校（後期課程）

Teaching Noh in Junior High School Music Class(2)

— Possibilities Offered by Classroom Practices in Understanding and Inheriting Music Culture —

NAKANISHI Saori and SAITO Takafumi*

Department of Music Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

*Kushiro Compulsory Education School (Lower Secondary Level) of Hokkaido University of Education

概 要

本研究の目的は次の三点を明らかにすることである。第一に、中学校音楽科の授業で能をどのように取り上げれば生徒たちが西洋音楽とは異なる能の音楽理論に基づく表現の特徴に気づき自分だけの表現に活かすことができるようになるかということ、第二に、能をどのように取り上げれば生徒たちが能の演劇的特徴やよさを自ら発見し能への理解を深めることができるかということ、そして第三に、能を取り上げる際、どのような授業内容・方法・目標によることが音楽文化の理解と継承のために有効であるかということである。以上三点を明らかにすることは、よりよい能の授業実践の可能性を示すだけでなく、教員養成課程の学生のための能の授業にもつながり、それがまた学校教育の場にどのように接続するかを展望する出発点となるかもしれない。前稿を踏まえ、本稿では、中学校音楽科における能の授業実践から、生徒が能への理解を深め能のよさや価値を見出し、日本伝統文化としての能の何をどのように伝えたいか形にしていくプロセスを検討し、よりよい授業実践の可能性を確認した。

はじめに

本研究の目的は次の三点を明らかにすることである。第一に、中学校音楽科の授業で能をどのように取り上げれば生徒たちが西洋音楽とは異なる能の音楽理論に基づく表現の特徴に気づき自分だけの表現に活かす

ことができるようになるかということ、第二に、能をどのように取り上げれば生徒たちが能の演劇の特徴やよさを自ら発見し能への理解を深めることができるかということ、そして第三に、能を取り上げる際、どのような授業内容・方法・目標によることが音楽文化の理解と継承のために有効であるかということである。以上三点を明らかにすることは、よりよい能の授業実践の可能性を示すだけでなく、教員養成課程の学生のための能の授業にもつながり、それがまた学校教育の場にどのように接続するかを展望する出発点となるかもしれない。本研究は、(1)「能って何?」「能の音楽とは?」「音楽の多様性」への理解を深める授業実践の可能性(中西・齊藤 2021)と、(2)音楽文化の理解と継承を目指した授業実践の可能性の二編から成り立つ。前稿の続編として本稿では、主に(2)と冒頭で述べた第三の目的に関して論じ、中学校音楽科における能の授業を通して生徒が能への理解を深め能のよさや価値を見出し、日本伝統文化としての能の何をどのように伝えたいか形にするプロセスを検討した。そして、音楽文化の理解と継承を目指した授業実践の可能性を提示した。なお、「はじめに」、1、2を中西、3、4、4-1を齊藤、4-2、「おわりに」を中西・齊藤が執筆した。

1. 音楽文化とは

「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律」には、音楽文化の「定義」、法律の「目的」、「施策の方針」などが明記され、「『音楽文化』とは、音楽の創作及び演奏、音楽の鑑賞その他の音楽に係る国民娯楽、音楽に係る文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四号)に規定する文化財、出版および著作権その他の著作権法(昭和四十五年法律第四十八号)に規定する権利並びにこれらに関する国民の文化的生活向上のための活動をいう」と規定されている¹⁾。また、柘植・塚田は、音楽文化を動態として捉え音楽は文化的アイデンティティーや民族的アイデンティティーを表現する手段として重要な役割を果たしていることや、人類の音楽文化を「世界音楽」という形で捉えそのコンセプトに基づいて音楽教育を進めていく重要性について述べている(柘植・塚田 1999, pp.6-17, pp.182-187)。このようなことは、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』に記された音楽文化への理解を深めることの説明文に記されたこととも重なってくる。「グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重できるようになることも大切である。これらのことは、自己及び日本人としてのアイデンティティーを確立することや、自分とは異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切にし多様性を理解することにつながる。このような意味において、音楽文化についての理解を深めることは、本来音楽科の重要なねらいであり、教科としての音楽を学習する音楽科の性格を明確にするものである」(文部科学省 2018, pp.9-12)。教育基本法の「伝統と文化を尊重」する教育の目標²⁾や、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』の改訂の要点にある、我が国や郷土の伝統音楽に関わる指導の更なる充実が求められていることから、伝統や文化に関する教育の重要性が一層見直されていることがわかる。

以上から本研究では、まず音楽文化を「音楽の演奏・創作・鑑賞などを通して人間の文化的生活が生涯にわたって豊かになり向上していくための活動から常に生み出されていくものであり、自文化としてのアイデンティティーの確立、自分と異なる音楽文化の価値の認識、文化相対主義や多様性への理解において重要な精神的活動とも結びついているもの」と規定し論を進めていく。

2. 音楽文化・伝統音楽に主眼を置いた音楽教育の研究や実践について

日本音楽の指導や能の実技の基本に触れるために、小島(2015a, 2015b)、本多(2020)、三浦(1998)、横道(1987)をここではまずあげる。学校教育において日本の音楽文化としての伝統音楽の教授・学習を行う意義や問題点については、小島・澤田(1981)、久保田・藤田編(2008)、伊野・澤田・藤田隆則・藤田加代・水戸(2006)らの研究がある。これらは、音楽文化を重視する視点から授業に伝統音楽を活かす方法論を探ることを視野に入れており、実践的な学習活動の意味を考える上で重要な指標となった。また、小塩・大学は、教員養成大学における和楽器(専門科目「和楽器」の箏の授業と自主授業「三味線」)や教員免許状更新講習における三味線の指導について論じている。受講生の中には卒業後教員としてその経験を活かし、今度は自らが指導者として和楽器の実技を指導したり、現職教員として三味線を取り上げた研究授業を実施したりした者がいるという。小塩は「三味線自主授業は、音楽学研究と大学や学校現場で『教える』という活動を結びつける大きな役割をもつ活動となった」(小塩・大学 2019, p.228)と述べているが、このような授業は教員養成大学等での学びと学校教育現場での実践とを結びつけることに大きな役割をもつだけでなく、音楽文化の理解と継承という視点からも意義深い実践研究といえるのではないだろうか。

清村は、伝統音楽の授業づくりにおいて文化的・歴史的背景の文脈を組み入れることの重要性について、「音楽の特徴と文化的・歴史的背景とを関連づけて考えることで、生活感覚に根差した知覚・感受が促され、実感の伴った音楽学習を実現する」と説き、授業として具体的に展開することの重点として「音楽を支える風土や気候、文化的・歴史的文脈を『情報』として与えるのではなく、『経験』として位置づけること」(清村 2015, pp.206-212)と主張している。

中学校における能の授業について、玉村・荻野(2017)によると、この研究は「実りある伝統文化教育を展開していくための足掛かりになることを企図」しており、最後に「伝統音楽の特質」について、「簡素」「抑制」などの言葉でよく語られる能の美学や特質などを「超えて」「さらにその『先』」に生徒が魅力を見出しているのではないかとということが指摘され、例えば謡・舞・囃子が一体となって能らしい表現となっていることやアンサンブルとしての面白さに生徒たちが反応したことが述べられている。第2学年、第3学年と継続的に計画された、体験を導入とした鑑賞の授業を通して、生徒の実態や実感に根差した学びの成果が示されているのであり、このことは先にあげた清村(2015)の主張とも重なるところがあるだろう。

また、小学校第2学年の実践であるが、桐山(2021)は伝統や文化を「昔から人々や心の中に根差し伝承されてきたもの、さらに人間が手を加えて作られてきた形のあるものや精神」と定義づけ、古くから伝承されてきた日本の音楽に基づくわらべ歌を取り上げている。児童が絵描き歌を創作する「ふしづくり」の授業を行い、創造の過程を経て、音楽的識別力、判断力、音楽的技術などが向上したことを確認し、伝統や文化を取り入れた「ふしづくり」の授業が有効であると結論づけている。児童が第1学年から、伝統的な音階に基づき絵描き遊びの経験を積み絵描き歌を創作してきたプロセスは、児童自身の実感に支えられた、音楽文化と深く関わる活動であると言えよう。

これらの研究や実践から、音楽文化の理解と継承を目指した、音楽文化・伝統音楽に関する授業において重要と思われることを三点にまとめておく。①学習者の生活や実態・実感に根差した音楽文化や伝統音楽に関する学習活動を継続的に積み重ねていくこと、②学習者が音楽文化や伝統音楽の体験を通して自らその後の活動を自律的に進めることができるようになること、③以上の活動を経て学習者が教材として体験したもののよさや価値に気づきそれらを他者に伝えたり他者と共有したりしたいと思うようになること。

3. 中学校における能の授業

前稿の内容と一部重複するが、授業設計の背景や授業計画の流れなどを再確認するために以下の通り述べる。令和3年1月26日中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）では、社会の在り方が劇的に変わる予測困難な時代を生きぬく子どもたちにとって必要な資質・能力を育む「令和の日本型学校教育」の姿として新学習指導要領の着実な実施とICTを積極的に使うことを前提とした、個別最適な学びと協働的な学びの充実が挙げられ、今後の音楽科教育においても念頭に置いて授業を設計していく必要がある。

今回題材となる「能」はこれまでの知見から、本校生徒にとって非常に遠い存在の音楽の一つである。北海道には伝統音楽としての「能」を身近に感じる施設が無いことや、現在子どもたちが触れている音楽との違いが大きいことなどから積極的に「能」について触れる経験があまりに少ないからと考えられる。しかし、我が国の伝統音楽の一つ「能」は世界的に見るとユネスコの無形文化遺産にも登録された非常に価値の高い日本の伝統的な音楽の一つであるとともに、日本人以上に海外の方からも高い評価を受けている実態がある。西洋の音楽とは異なる音楽理論から生まれた芸術が、およそ700年前から受け継がれているその「能」には、私達日本人が受け継ぐべき価値や魅力があり、それに触れ、味わうことは義務教育の段階において非常に重要であるのではないかと考えた。

そこで、第3学年（授業時の学年）のために次のように題材名と題材の目標を設定した。

第3学年

「Noh ～世界に誇る日本文化の価値を探ろう」

・題材の目標

- (1)我が国の伝統音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解して聴いている。【知識】
- (2)音色，リズム，速度，旋律を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに，音楽表現の曲想と音楽の構造との関わりについて考え，音楽のよさや美しさを味わって聴いている。【思考・判断・表現】
- (3)鑑賞の学習やリーフレットを制作する学習を通して，音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わりなどに関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組んでいる。【主体的に学習に取り組む態度】




3-1 計画

題材の目標を達成するために今回は使用する中心題材を「船弁慶」とした。昨年度から教材研究を深めている「船弁慶」はストーリーがわかりやすく、取り上げる後半部分については音楽の盛り上がりなど生徒にとって捉えやすい部分が多い。また、使用する映像資料も扱いやすいものがあることから、今回の中心題材とした。しかし、これまでの経験上、いくら捉えやすい題材だからといっていきなり鑑賞をさせると理解が深まらず、十分な鑑賞に至らない生徒も一部にすることが考えられる。また、今回の題材で目指すのは、「船弁慶」のよさを見出すことはもちろんだが、それだけではなく、学習計画全体を通して「能」のよさや魅力を捉え、発信することを目指している。

そこで、学習の大まかな計画として下図のようにStep 1 からStep 4 を設定し、鑑賞の理解を深めるとともに、学びを活かしてアウトプットすることを計画した。

Step 1 能全体の概観を捉える→Step 2 能の謡を体験する→Step 3 鑑賞→Step 4 リーフレットづくり

その詳細と評価規準は以下の通りとなっている。

時間	学習内容	評価規準		
		知識	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	○能の音楽との出会い ・歴史や楽器, 面についてなど			
2	○能のうたってどんなうた? ・謡について ・謡の体験			
3	○《船弁慶》の魅力 ・《船弁慶》の後半視聴 ・謡, 楽器の特徴を考える	船弁慶の特徴とその特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。	音色, リズム, 速度, 旋律を知覚し, それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら, 知覚したことと感受したこととのかかわりについて考えるとともに, 曲や演奏に対する評価とその根拠について考え音楽のよさや美しさを味わって聞いている。	
4	○能の魅力を詰め込んだリーフレットづくり ・外国の人や初めて能に触れる人たちのためにリーフレットをつくる	我が国の伝統音楽の特徴とその特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。	我が国の伝統音楽のよさや美しさとはどこにあるのかその魅力について考え, リーフレットに表現している。	鑑賞の学習やリーフレットを作成する学習を通して, 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史, 他の芸術とのかかわりなどに関心をもち, 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

このように計画することによって, これまで遠い存在であった能について関心を高めるとともに, 能のよさや魅力について捉え, 日本文化として受け継ぐ必要性や世界に向けて発信することの大切さに気づいてほしいと考えた。

4. 授業実践

本稿では冒頭で述べた「音楽文化の理解と継承」に焦点を絞り, 4時間目のリーフレット制作の活動を取り上げ, その結果について考察する。

1～4時間目の使用映像教材

- ・能 船弁慶～後半～ (字幕・解説付)

<https://www.youtube.com/watch?v=zUjHwFOXluc>

- ・能を楽しむための基礎知識❖日本の伝統芸能【日本通tv】

<https://www.youtube.com/watch?v=RNE60ygYH6E>

- ・能楽を楽しむvol. 1 「能と狂言の違い」

<https://www.youtube.com/watch?v=Qjlg9ov34Y4>

- ・能楽を楽しむvol. 2 「能面の裏側に迫る！」

<https://www.youtube.com/watch?v=cwPCAzLneGw>

- ・能楽講座①「初級編」 お能を楽しむ〈構成・ストーリー〉

<https://www.youtube.com/watch?v=T1dy-soCoAM>

・能楽囃子の楽器紹介

<https://www.youtube.com/watch?v=olyMfAA8TJE>

・【8分でマスター！】有名な『高砂や〜』を謡ってみよう！

https://www.youtube.com/watch?v=40fk_gmEeCA

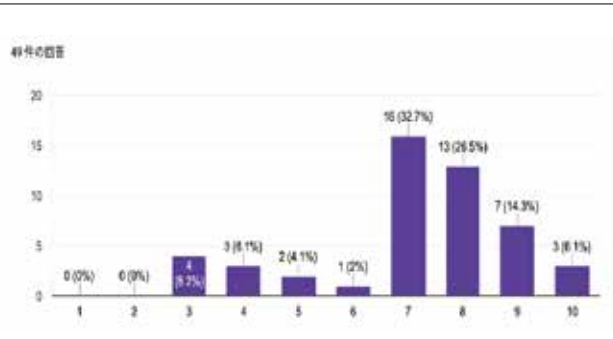
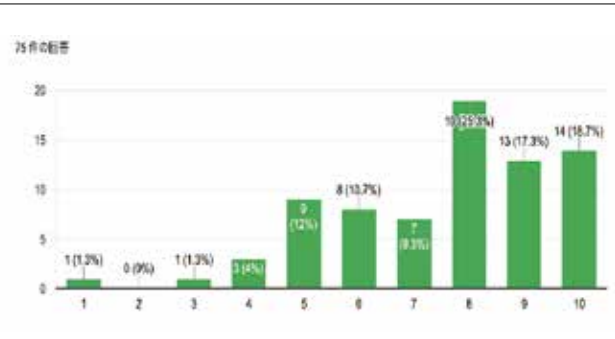
4 時間目

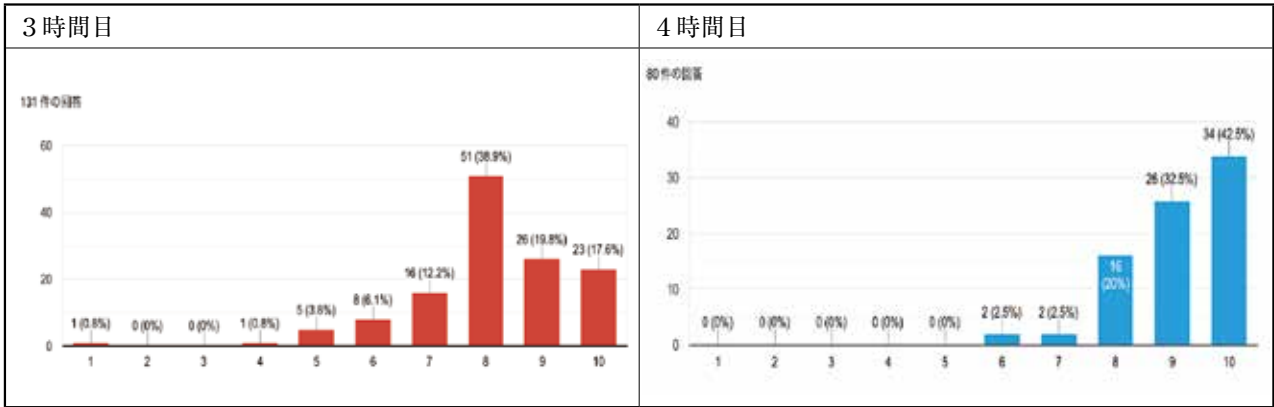
目標：リーフレット制作を通して、能の音楽的な特徴の理解を広げるとともに、我が国に伝わる伝統音楽のよさや魅力について考えをまとめることができる。

生徒の姿	教師の働きかけ	備考
1. 能のよさやおもしろさ、特徴について交流し、発表することができる。	○これまでに捉えた能の特徴やよさの中で一番心に残っていることはなんですか。	*学習を振り返るとともに、リーフレットを作るための目的や意図を考えさせることを大事にさせる。 *インターネットを用い、新たに情報を収集する。
外国の方や、初めて能に触れる人のために「能」のよさが詰まったリーフレットを作成しよう		
2. リーフレット作成の説明を理解し、仲間と協力して制作することができる。	○能について学習してきたことにはどんなことがありましたか。 ○リーフレットには特にどんなことがあると良いと思いますか。	
3. 完成したリーフレットをAirdropで提出することができる。	*Keynoteを使って制作。フォーマットや割付の例は作成し、提示する。 *教室にはいつでも学習を振り返ることができるように映像を流しておく。 *学習内容を中心に、体験した思いや考えたことを表現することを大切にする。	
4. リフレクションをする。	○単元を通してどんなことを考えましたか。	

授業の様子 1	授業の様子 2
	

【能についてのよさや魅力、価値などをどのくらい捉えることができましたか 1～4時間目の変遷】

1 時間目	2 時間目																																																																		
<p>49件の回答</p>  <table border="1"> <caption>1 時間目 正解の割合</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>正解数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>2</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>3</td><td>4</td><td>7.7%</td></tr> <tr><td>4</td><td>3</td><td>6.1%</td></tr> <tr><td>5</td><td>2</td><td>4.1%</td></tr> <tr><td>6</td><td>1</td><td>2%</td></tr> <tr><td>7</td><td>16</td><td>32.7%</td></tr> <tr><td>8</td><td>13</td><td>26.5%</td></tr> <tr><td>9</td><td>7</td><td>14.3%</td></tr> <tr><td>10</td><td>3</td><td>6.1%</td></tr> </tbody> </table>	項目	正解数	割合	1	0	0%	2	0	0%	3	4	7.7%	4	3	6.1%	5	2	4.1%	6	1	2%	7	16	32.7%	8	13	26.5%	9	7	14.3%	10	3	6.1%	<p>25件の回答</p>  <table border="1"> <caption>2 時間目 正解の割合</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>正解数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>1</td><td>1.2%</td></tr> <tr><td>2</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>3</td><td>1</td><td>1.2%</td></tr> <tr><td>4</td><td>2</td><td>4%</td></tr> <tr><td>5</td><td>9</td><td>12%</td></tr> <tr><td>6</td><td>8</td><td>13.2%</td></tr> <tr><td>7</td><td>7</td><td>9.3%</td></tr> <tr><td>8</td><td>19</td><td>76%</td></tr> <tr><td>9</td><td>13</td><td>17.3%</td></tr> <tr><td>10</td><td>14</td><td>18.7%</td></tr> </tbody> </table>	項目	正解数	割合	1	1	1.2%	2	0	0%	3	1	1.2%	4	2	4%	5	9	12%	6	8	13.2%	7	7	9.3%	8	19	76%	9	13	17.3%	10	14	18.7%
項目	正解数	割合																																																																	
1	0	0%																																																																	
2	0	0%																																																																	
3	4	7.7%																																																																	
4	3	6.1%																																																																	
5	2	4.1%																																																																	
6	1	2%																																																																	
7	16	32.7%																																																																	
8	13	26.5%																																																																	
9	7	14.3%																																																																	
10	3	6.1%																																																																	
項目	正解数	割合																																																																	
1	1	1.2%																																																																	
2	0	0%																																																																	
3	1	1.2%																																																																	
4	2	4%																																																																	
5	9	12%																																																																	
6	8	13.2%																																																																	
7	7	9.3%																																																																	
8	19	76%																																																																	
9	13	17.3%																																																																	
10	14	18.7%																																																																	



学習を経るごとに、能についてのよさや魅力を捉えている様子がりフレクションからもわかる。能の鑑賞、リーフレットづくりを通して生徒が、能のよさや魅力、価値について考えていったことがわかる。

【学習を通して能についての関心の高まり 1～4 時間目の変遷】



学習を通じた能への関心の高まりを示したものである。1 時間目より関心は低くはないが、1 時間目の概要を捉え、2 時間目の体験、3 時間目の鑑賞、そして4 時間目のリーフレットづくりを通して、能への関心が高まったことがりフレクションからみとることができる。

4-1 リーフレット

以下に生徒が制作したリーフレットのの一部をあげる（6グループ分）。2クラスの授業より。各グループは3～4名。



能について
能は簡単に言えば、「ミュージカルのような存在」

「謡(うたい)」という声楽と「囃子(はやし)」という楽器演奏に乗せて、舞踏的な動きで物語を進めていく。

室町時代に観阿弥、世阿弥という父子により大成されたと伝えられており、現在もその形はほとんど変わっていない。

同じ伝統芸能である狂言との違いとしては、狂言は笑うための芝居であるのに対し、能は歴史のある神話や物語を題材にした悲劇のものが多いことが挙げられる。



能装束

能装束とは…

能に使われる衣装のこと

能の舞台を彩る能装束は、役柄によって取り合わせが決まっています。

色入り

色無し

女性では…



若い女性 → 紅系の色
中年の女性 → 紅系の色がなく、緑や青

船弁慶では…

幽霊が船を沈めようとするシーンは、「海の上」という設定なので衣装が波の模様になっている。



囃子と地謡



囃子

主に太鼓 小鼓 大鼓 笛の4人で演奏される。

物語が盛り上がりに入るとテンポと音量が大きくなる。シテの舞を盛り上げたり、謡の伴奏を担当する。

掛け声は「ヤ」「ハ」「ヨーイ」「イヤ」など拍子を確認する。

地謡

シテやワキとは別に物語を引き立てる能の謡を謡う。

主に8人で構成される。

セリフに近い「コトバ」決められたリズムで謡う「フシ」に分けられる。



物語の説明

多くある物語の中から「船弁慶」を紹介します。



船弁慶のシテ(主人公)は平知盛。

ワキは弁慶と源義経。壇ノ浦の戦いで敗れた知盛の亡霊が義経を海に沈めようとするのを弁慶が止めるお話。

物語の工夫

「シュー」というで船の到着を表現。動いている人以外は動かない。



能については日本の伝統芸能だということしか分からず、全体的にぼんやりしていました。けれど、今回の授業を通して少しずつ能の魅力に触れる事ができた気がします。特に、衣装や能面の角度などで情景や感情を表現していたりするのがとても面白いと感じました。

今までは、能についてなんとなく知っている程度でした。今回リーフレットを作成する中で、能はシンプルでありながら、場面を表現する沢山の工夫があることがわかりました。そして、世界に誇れることのできる日本の文化であると強く感じました。

初め、能には関心が全然持てませんでした。しかし、実際に能の謡を謡ったり、能の歴史を知ることによって能にはこんな奥深さがあるのかと、興味を持つことができました。船弁慶ではお話の内容が理解できるととても面白かったです。

Do you know Noh ?

能の舞台

能面

- 翁…能面の中で最も古い
- 尉…老人の面
- 女面…一番よく使われる
- 男面…色々な種類がある
- 鬼神…鬼や天狗など
- 怨霊…この世に恨みを持つ死霊



ポイント!

直面(ひためん)

- 能面を「かける」のは、主演(シテ)と助演(ツレ)のみ!
- ワキは生きている人間だから見る角度によって表情が変わって見える!

能舞台



明治時代までは屋外にあった
全員パーツにヒノキが使われている
鏡板には、大きな松が描かれている
奈良の「影向の松」がモチーフ

能の音楽的要素



能では、笛、小鼓(こつづみ)、大鼓(おおつづみ)、太鼓の4種類の楽器が使われます。曲によって太鼓が入るものと入らないものがありますが、どのような内容の曲でもすべてこの組み合わせで表現されます。能には指揮者がおらず、太鼓が入るものでは太鼓が、それ以外のものでは大鼓が、能の音楽全体を統率しています。また、打楽器奏者が掛け声を発するのも特徴的で、出演者はこの掛け声で拍数や間合いをはかっています。



登場人物以外の役割
地謡=場面の情景や人物の内面を語る
囃子=楽器の演奏と掛け声

能の魅力

能の魅力は、まず700年近い歴史を持ちながらも、絶えることなく今に継承されてきたことです。これだけ長い歴史を持つ能が、現代の人にも受け入れられているのは、そこに多くの魅力が存在するからだと思います。
私が能の演目『船弁慶』を観た際には言葉の壁を感じながらも、演者の謡や囃子の音楽から感じることができました。
なので「一つ一つの言葉を聞き漏らさないように」と構えて観る必要はまったくなく、想像力をたくましくして、舞台上の演者の息遣いを感じれば、能に関する知識がなくても十分に楽しめると思います。



また、歌舞伎や現代の演劇などとは異なり、大がかりな舞台セットや小道具などが置かれていない簡素化された能舞台、舞と音楽は非常に印象深く、多くの演目は普遍的なテーマを扱っていることも長く、そして広く愛される理由ではないでしょうか。

ぜひ、日本最古の伝統芸能「能」に
ふれてみてください!

能とは

歴史



音楽・舞踊・演技が一体となった歌舞劇
6世紀から7世紀に中国から伝わった。
観阿弥・世阿弥によって形が整えられた。

会場



【本舞台】

三間(5.5m)四方の舞台上で檜板が縦に張られています。檜板の下には壺が設置してあり音響効果を高めています。

【後座】

本舞台垂直方向に檜板が張られていて、本舞台寄り囃子方座と呼び、向かって右から笛・小鼓・大鼓・太鼓の順に座ります。左奥は後見が座る後見座です。

【橋掛り】

演者が出入りをする通路ですが、舞台の延長としての重要な演技空間でもあります。

【目付柱】

能面をつける事で演者の視野は非常に狭くなりますが、そのような際にも演者の目標となる重要な柱です。

Noh's music

地謡と囃子という演奏者によって上演される



⇒太鼓は曲目によって入らないこともある

謡の伴奏や舞の音楽を担当する。

地謡は8人で編成されシテの心理やなどを描写した謡を担当する



謡

シテやワキの登場人物や地謡が歌う。

Noh's item

笛(能管)



竹製で7つの穴が空いている。指で穴を塞ぐことによって音程を変える。笛以外の楽器は打楽器なので、笛の高い音は能の舞台で大きなアクセントになる。

小鼓



右に手のひらを使い、革の部分で叩いて演奏する。「中」「チ」「タ」「コ」という四種類の音がある。

大鼓



バチを使って演奏する。「つ」「でん」という二種類の音がある。「つ」→面にバチをつける音「でん」→響かせる音

太鼓



二本のバチで叩いて演奏する。「ドーン」というよりも「トン」という乾いた音がある。物語の展開をわかりやすく表現する大きな役割を果たしている。

発声

能 声の特徴

能で発せられる声は特徴的で太く、力強い声を長時間にわたって出し続けています。



なぜ約3時間も力強い声を出しきれぬのか？それは呼吸の仕方にあります。能では腹式呼吸を使い長時間声を出し続けています。



実際に声を出してみて！！

やる前は簡単だと思っていたけど、やってみたら思ったより声が低くて喉を潰して声を出すのが難しかったと思います。

実際に体験してみ

3人の方は実際に能の授業を受けたと聞いています。どのように感じましたか？



Nさん
楽しかったです。登場シーンが豪華で、歌声と演奏がとても力強いと思いました。実際には行っていないことを行っているように見せているのが面白いと感じました。特に印象に残っているのは独特な声の出し方です。腹式呼吸を使い、力強い発声でした。演奏では、ほとんどリズムが一定でしたが、登場シーンになるとリズムが変わり、迫力があって印象に残っています。



Aさん
すごい力強くてシンプルなんですけど印象に残りやすい日本の伝統音楽だと思いました。実際に声出して試してみても長時間にわたり、低い声をだして、難しさを強く感じました。今まではあまり関わる機会がなかったのですが、興味が湧きました。



Sさん
能に関わる機会はありませんでしたが、知識も全然ありませんでしたが、この授業を通して、理解が深まりました。発声では、思っていたよりも低くて、難しいと感じるぶんがありました。それでも実際にやることによって実感が得られて楽しかったです。今後は日本のおもしろい伝統に触れてみたいですね。



Noh is a world-famous tradition from Japan



能とは？



【能】

能は、奈良、平安時代から庶民の間で親しまれてきた歌舞音楽や、神への奉納の舞から派生したものである。鎌倉時代後期から室町時代前期に、世阿弥によって大成された。明治時代以降、海外にも広く紹介された能は国際的に評価され、世界無形遺産に指定された。

【能の特徴】

シンプルさを基調とした能では、歌舞伎や現代の演劇などとは異なり、大がかりな舞台セットや小道具などが置かれるわけではない。また、背景や照明といった演出もないため、いかに役になりきることができるかが問われる。

【なぜ世界的な人気を誇るのか？】

能が表現しているのは、多様な人間の感情や哲学的な問いである。

その普遍的な様は、日本の私たちだけでなく、世界のいろいろな民族、国の人たちが見ても、同じように人間の素朴な感情や深い思考に触れることができることが挙げられる。

能の学習を終えて

能の音楽を聴いてみて面白いと思いました。例えば楽器と人の声だけで盛り上がっていたりしてすごいと思いました。

私は、能の学習を経て、芸能における表現の多様性に気が付きました。私たちが日頃から触れてきた芸能といえば、演劇、楽器演奏、歌唱などがありましたが、能はそれらの表現法とは一味違うと感じました。シンプルさを基調とし、最低限の演出で、しかし演技や道具といった細部にもこだわりながら進められる能は、古来からの伝統が根強く残っている、今後も継承すべき日本の文化だと感じました。

能の学習を終えて、日本最古の伝統芸能の良さに気づくことができました。直接能と関わることはないかもしれませんが、守るべき文化として大切にしていきたいです。

能楽は、背景が変わらない分、役者のセリフや動き、謡の強弱など、細かなところまで気付くことのできる音楽だと思いました。また、主演が面をつけているので、表情を直接見ることはできませんが、独特のセリフや指先まで美しい動きを堪能することができるので、楽しみながら見られると思います。



noh
Japanese
Noh



4-2 生徒の振り返り・感想等と考察

4の4時間目の授業のところで、生徒の能への関心が高まったことをみとることができたが、ここでは、生徒の関心がどのように高まったのか具体的に見ていく。3時間目までに学んだり身につけたりしたことを活かし今度は自分が伝える立場でリーフレットをつくるという目標を達成した生徒のリフレクションの記述を以下にあげ、大きく①～④に分けて考察する。(下線は筆者)

- ①能への興味の拡がり——授業を通して実感したこと、能へのイメージや印象の変化、その後への展望
- ②リーフレットづくりのポイント——制作者としての意識・意図・目的
- ③「能って何？」を他者に伝える——私が伝えたい能のよさ・価値・魅力
- ④日本文化とは——能の学習を通じた日本文化への理解・愛着・誇り

①能への興味の拡がり——授業を通して実感した能へのイメージや印象の変化、その後への展望

❖能の学習全てを通して「能」について知ることが出来てほんとうに良かったと思う。この授業をやる前も「能」や「能面」の存在は知っていたけど自分のなかではかなり曖昧だったからこう、はっきりと日本の文化を知ることができるのは良かったと思う。能を分かればわかっていくほど面白い、というか興味が湧いてきて楽しかった。

❖初めはなぜこれほどまで長く受け継がれてきたのか、なぜここまで人気があるのかなどと疑問に思っていたのですが、能の歴史や謡い方、実際の能を見たりすることによって自分自身も好きになることができたし、凄いなと感動させられることもありました。このように、幅広い人々に人気があったりこのような授業があるから受け継がれてこれたし、今もなお人気があるのだなと思いました。もう能の授業は終わってしまうけど、家族に紹介してみたりなど僕も繋いで行けたら良いなと思います。能の授業を受けることができてよかったです。

❖この単元を通して能について少しでも理解を深める事ができた。能は今までみたりしたことがなく初めて見たけど最初見た時は、変だなあと思ったけど後々調べてみると謡や動き、容姿に気持ちや思いが隠されておりそのようなことを理解した上で見てみるとすごい面白かったです。なのでこれから見るような機会があれば是非見てみたいと思いました

❖今日はリーフレットを完成させて、改めて能のよさを感じることができました。最初は能について堅苦しいイメージがあったけど授業を受けていってるうちに面白いと感じるようになりました。できることが少ない時代に完成したので舞台の工夫や面の工夫、音の出し方の工夫があったり、セリフの声の出し方の工夫などを見つけていくうちに能を見るのが楽しくなってきました。授業を受けていなかったら能の良さに気づけなかったと思うので、今回授業で能について知れて良かったです。

❖最初、能は関わりにくいものだと思っていたから、この学習を通して身近に感じる事ができました。話の内容がわかったり、特徴などを深く知っていくうちに能がどんなものなのかがわかってきて、さらに、謡を実際にやってみて、能を少しでも感じたり、考えることができました。能のお面についてや、動きなどのすごく細かな工夫などを知って、音と声と踊りというふうにすごくシンプルなのに長い間受け継がれてきている理由がわかりました。説明がなかったら何を言っているのかとか、だれがどの役でどんな話なのかなどが分からないし、まだ少し触れにくいけど、一つ一つが丁寧に作られていて、長い間受け継がれてきている日本の伝統芸能なので、生きていく中で、忘れないようにして少しでもいいから、触れていけるといいと思いました。

「曖昧」「疑問」「堅苦しいイメージ」「関わりにくいもの」などと表現されていた能へのイメージが、授業を通して「はっきりと日本の文化を知ることができるのは良かった」「好きになることができた」「面白い」「身近に感じる」など大きく変化し、能の授業を受けることができてよかったですというような記述からは満足度の高さもうかがわれる。現代まで受け継がれてきた能の歴史への関心も高くこれは上記④にもつながることである。その到達地点からさらに先へ、「わかればわかっていくほど面白い」「家族に紹介し」「僕も繋いで行けたら良いな」「機会があれば是非見てみたい」「長い間受け継がれてきている日本の伝統芸能なので、生きていく中で、忘れないようにしてすこしでもいいから、ふれていけるといい」など、生徒の能への認識

の仕方や内面の変容も見られる。このことは、小島 (2015) の言う「内的世界」の生成 (小島 2015a, pp.4-5) と関わる重要な学びのプロセスと言えよう。「このような授業があるから受け継がれてこれた」という、授業で取り扱われることの重要性への言及も見られる。授業で能を取り扱う意義にもつながるだろう。

②リーフレットづくりのポイント——制作者としての意識・意図・目的

- ❖ 今回の能の授業を通して、新たな発見が多くリーフレットに書きたいことがたくさんあって、まとめることがとても大変でした。自分が今回学び、そして新たに気づいたことが少しでも、リーフレットを読む人に伝わればいいなという思いで作りました。リーフレットにまとめていく中で自分が思っていた以上に能の魅力に気づくことができたように感じました。この魅力を能をあまり知らない人にも伝えていければいいなと思いました。
- ❖ 自分の担当は、能の舞台や能面について紹介する事でしたが、調べていけばいくほど、沢山の情報が出てきたので、取捨選択するのが大変でした。その際に意識したのは、「経験者」の立場から、何を伝えれば、読み手の「見たい!」を創れるか。ということです。なので、複数の記事を見比べて、共通して書かれている情報を自分の言葉にして伝えました。
- ❖ 今回の能の単元を通して、最初は能についてあまりわからなかったけど、歌舞伎や狂言と違った日本の伝統芸能の一つであり様々な工夫があって今日まで続いてきたという事がわかりました。能面の見える角度の違いによって表情の見かけを変えたり、狭い舞台で幕を少し下ろしたりして距離を表すなどの工夫がすごいと思いました。リーフレットを作ったりして、約600年の歴史が続いていくといいなと思いました。
- ❖ リーフレットを作るにあたって、外国の人にも能の良さをわかってもらえるように英語も用いてリーフレットを作りました。授業を通して、はじめは能を見たこともないし興味もなかったのですが、話が分かったりとか構成とかも理解することで面白く感じられました。たったの四つという楽器でここまで色々な音が出せたり、声の出し方もお腹から来た声を喉で搾り取ってから低く太く出すのは簡単じゃないと思いました。音の出し方が、足を使ってどどんしたりだとかして、少ない楽器でも他の音を出すために工夫がされていると感じました。
- ❖ 今までの授業で能についてたくさん学び、この日の授業ではその日の集大成としてリーフレットを作りました。リーフレットを作っている時に教科書やプリント、今まで書いたメモなどを見返して、能への理解がさらに深まった気がします。私は今まで社会の授業で勉強したり、テレビで見たりなど、日本の伝統芸能なものにも関わらず、あまり興味を持たず、能について知らないことばかりでした。ですが、今回の授業で能について知らなかったことを知ることができて、とても興味を持って楽しく授業を受けることができました。特に印象深かったのが能面や役、舞台や楽器についてなどです。今まではお芝居する人がかぶるただの面だと思っていた能面が、角度によってたくさんの表情が表せること、シテやワキなど役柄によって能面や装束が変わること、背景がなく、照明が一定であること、囃子方と地謡をバックに物語が進むことなどたくさんを知りました。700年ほども前からずっと昔ながらの形で残り続けている能は素晴らしい日本の伝統芸能だなと感じます。これから、能だけでなく、他の日本伝統芸能についてもたくさんを知り、後世に伝承していければいいなと思います。

「新たな発見」「書きたいことがたくさん」「読む人に伝わればいいな」「集大成」というような記述からリーフレット制作への意欲や目的の明確さがうかがわれる。そのようなモチベーションの根底には、取り上げた教材のよさや授業の組み立てや進め方が生徒の実態に合っていたことがあるだろう。「声の出し方」「音の出し方」「少ない楽器」など、これまでに学習した音楽との違いを実感しリーフレットづくりに活かそうとする意図が見られる。1時間ごとに学習活動が積み重なるにつれて、生徒の能への関心が高まっていったことは4の「1～4時間目の変遷」からも明らかである。リーフレットづくりの活動において、生徒がそれまでの学習を振り返り、何を伝えるべきか再考を重ね、自ら発見した能のよさや価値をより具体的に形にしていったことがわかる。

「歌舞伎や狂言と違った日本の伝統芸能の一つであり様々な工夫があって今日まで続いてきた」「外国の人にも能の良さをわかってもらえるように英語も用いて」というところに「日本文化として受け継ぐ必要性や世界に向けて発信することの大切さに気づいてほしい」という授業のねらいを生徒が理解し、能を世界へ

向けて発信するにふさわしいものとしてその価値を認識し、誇りや自信をもって広く世界へ発信したいという意図をリーフレット制作に盛り込んだことがわかる。リーフレット制作を通して「約600年の歴史が続いていくといいなと思いました」と実感したことから、その長い歴史をこれからもつないでいくことに自分が関わっていることの自覚も生まれていく活動であると考えられるのではないか。

能面のことや能の発声、舞台や楽器、背景や照明など、③の「私が伝えたい能のよさ」にもあてはまる内容だが、細やかに具体的にリーフレットに取り上げたい内容が生徒の言葉で記述されている。生徒の実感に根差した能のよさや価値が明確に言語化され、「他の日本伝統芸能についてもたくさんを知り、後世に伝承していければいいな」という希望につながっていく。授業のねらいや願いのさらに先に拡がる活発な活動と成果を見ることができる。

③「能って何？」を他者に伝える——私が伝えたい能のよさ・価値・魅力

❖私は、今回の能の授業で、日本芸能の奥の深さを知るとともに、能の難しさについて学ぶことができたと思います。以前、大学の先生に「能」について教えてもらえる機会があり、学ばせていただけたこともあったので、能についてはある程度知っている自信があったのですが、意外と知らないことが多く、すごい楽しかったなと思える単元で、能に触れるのが楽しく思えたのは良かったなと思います。ちょっとしたことで、全てに意味があることを知れて、すごい能に興味を持った授業だったなあと感じました。とくに、若女は美女、般若は女性の嫉妬を表していること。また、お面の角度によって顔の雰囲気を変えることなどの、お面に関わる情報や、背景がないこと、照明が変わらないことによるおもしろさについて学んでいる時が自分の中で一番印象に残っています。

❖今回、リーフレットを作成するときに 私は、能で使われる道具についてや囃子の楽器について迫りました。能はBGMがなくて使える道具も他のものと比べるとあまり多くないと思っていたのですが、道具はいろいろなバリエーションがあって、思っていた以上にたくさんありました。道具には竹をおもりに使って日本風な感じの観客の創造を豊かにさせるような作りになっていて自分で調べていてとても面白いな~と思っていた。囃子に使われる楽器は、四つしかないがその四つの中で、メロディーは笛。柔らかい感じは小鼓。かたい感じは大鼓。人間以外の鬼や精霊などを表しているのは太鼓など、いろいろな役割があってこちらとても面白かったです。能だけではないかもしれないが演者だけではなくて、裏方の人や細かな道具の工夫がたくさん年月で親しまれているのだな!と思いました。自分的には裏方の演奏者、謡、後見人などの役割も詳しく調べてみたいなと思いました。

❖最初はよくわからなかったし能について詳しくは知らなかったけど、この授業を通して能に使われている楽器（能管・太鼓・大鼓・小鼓）やシテやワキの役割などわかることができて楽しかったです。能は一つでも役割がなくなったら成り立たないからどれも必要な役割なんだなあと感じることをできました。また、能はオペラと違って一定のスピードで一定した安定で歌っていて、実際に授業で歌ってみたときはきついなと感じるところも多かったけど能の魅力を感じることもできたので良かったと思います。

❖能は授業でやる前は、歌舞伎とちょっと違うだけで、ほとんど同じようなものだろうと思っていたけど、学習してみると全然違うことが分かって、歌舞伎は華やかなものだったけど、能はシンプルなものであるということがわかった。能は600年以上も形を変えずに続いてきたのもあって今の音楽と違うところは沢山あったけど、だから能がダメなのではなく、その個性的な面も能が長い間受け継がれることになった魅力の1つなんだなと感じた。

「日本芸能の奥の深さ」「能の難しさ」という言葉からは、学びが深まっていった様子がうかがわれる。知らないことがたくさんあることへの気づきが新たな学びに発展し、そのプロセスを「楽しかった」と表現したことは、「魅力」の発見とさらに学びたいという意欲へとつながるのだろう。各生徒が「面」「道具」「囃子の楽器」など伝えたい要素をあげ、「オペラ」「歌舞伎」「今の音楽」などとの比較の視点も示し、音楽の多様性を理解しつつ、私なら能のよさをこう伝えたいという認識を明確にしている。船の作り物について、「観客の創造をゆたかにさせるような作り」と述べている。能では他の演劇のような舞台装置は用いず、作

り物は全て持ち運びのできるものであり、生徒が言うように、想像力によって観客の頭の中に情景が創造されていくことも少なくない³⁾。これも能という演劇の大事な特徴の一つである。またこの生徒は、「四つしかない」楽器それぞれの特徴と役割を自分の言葉で簡潔に説明し、「裏方」「後見」などへも興味を示している。能を上演する際、表舞台に見えている人たちだけでなく、「裏方」も無くてはならない存在であり、横道（1987）はこれを「裏仕事」と呼びその重要性について説いている（横道 1987, pp.38-46）。そこに蓄積された知識・経験・工夫といったものは確かに「たくさんの年月」によって出来上がっている。能の根底にある文化・社会・伝統などへの気づきの出発点と言えるのではないか。「今の音楽と違うところは沢山あったけど、だから能がダメなのではなく（後略）」と記述した生徒は、現代人としての自身の音楽経験の実感から見た能の音楽の特殊性について語っている。「ダメ」なのではなく、そこが魅力であると納得している点に注目したい。音楽の多様性を大切に捉え、音楽文化や伝統音楽の価値への理解が深まった授業の成果と言えよう。

④日本の文化とは——能の学習を通じた日本の文化への理解・愛着・誇り

❖今まで能がどのようなものなのかを知らなかったし、興味もなかったけど、この音楽での能の学習を通して、能の良さや価値を知ることが出来た。背景や照明が一切変わることがない能は、役者の動きや囃子の音の速さ、強弱などで場面を表しているにも関わらず、分かりやすかった。そして、役者がつけている面は、見せる角度によって苦しく見えたり、怒っているように見えたりすることにとても驚いた。能の謡は、合唱の歌い方とは違って、喉を潰して歌わなければいけなかったのでとても難しく感じた。日本で生まれた伝統的な能は、これからも受け継がれるべきだと思った。機会があれば、生で見に行ってみたい。

❖能の学習を通して考えたことは、私達日本人は日本の文化について知ってるようで知らないものが多いんだなと思いました。最初能と言われてお面をつけてよくわからない言葉をはっているだけなのかと思いました。しかし、650年の歴史があったり、面によって誰でもできたり、角度によって表情を変えたり見る席によって変わったり、地謡など色々なものが組み合わさって一つの芸になるんだなと思いました。歌い方も独特だし、海の先の音楽と違ってその国独自の素晴らしさを感じられて最高の4時間を過ごすことができ、これからも深く学んでいきたいなと思いました。

❖一言でとても楽しかったです。今まで能について全く知らなかったし、知ろうとしてもしなかったんですけど、今はもっと能を知りたいなという気持ちでいっぱいです。能には細かいところまで工夫がなされていて、観客が見ていて飽きないようになっている所がたくさんありました。特に太鼓の音やテンポ、また声などを場面の流れに合わせているところや舞台の背景、照明をなしにする、あえて質素にすることで観客に面白いと思わせるようにしているところが、印象に残った。今回の授業を通して、いつか能を見てみたいなと思いました。これからもたくさん能のことを知って、日本人として伝統文化を胸を張って言えるようになりたいです。

「知らなかった」「興味もなかった」から「能の良さや価値を知ることが出来た」となり、「これからも受け継がれるべき」「生で見に行ってみたい」と進んだプロセスは、4時間の授業が有意義に積み重なって生じた結果である。この生徒はリーフレット制作までの授業を経て、能舞台、役者の動き、囃子、面、謡など、能の特徴を舞台芸術として総合的に捉え、「日本で生まれた伝統的な能」に「これからも受け継がれるべき」良さや価値があることを身をもって体験し、日本の文化への理解を深めたに違いない。日本人として「日本の文化について知っているようで知らない」に気づき、「深く学んでいきたい」と意識を高めた生徒もいる。つまり、前稿で授業の成果としてあげたが、「知らない」からスタートし「知る必要がある」への変容である。「最高の4時間」がこの生徒の学びの全てを物語っているだろう。それは「海の先の音楽と違ってその国独自の素晴らしさを感じられ」たからである。「独自の素晴らしさ」という表現には、深い愛着と誇りがうかがわれる。「あえて質素にすることで観客に面白いと思わせるようにしているところ」は、「不要なものを削ぎ落とし、高度に抽象化・様式化した芸能」（本多 2020, p.87）というような能の演劇的特徴と重なることである。「これからも（中略）伝統文化を胸を張って言えるようになりたい」という誇りや、「もっと能を

知りたい」という学び続ける意欲も見られる。

紙幅の都合によりリーフレット一つひとつに書かれた内容は今回は取り上げないが、「世界に誇ることのできる日本の文化」「現代の人にも受け入れられているのは、そこに多くの魅力があるから」「古来からの伝統が根強く残っている、今後も継承すべき日本の文化」「守るべき文化として大切にしていきたい」という記述からも、生徒たちが能の学習を通して日本の文化や伝統への理解を深め愛着・誇りを高めていることがわかる。

近隣地域にはプロフェッショナルな能楽師が居住していないため、生で能を鑑賞する機会をつくるのは容易ではない。能舞台は、コンサートホール設置用の特設のものがあるだけである。文化庁などの芸術家派遣事業を活用したり、最近授業などで利用されているオンラインによる体験や鑑賞などが可能性としてはあるだろう。今後の課題である。

おわりに

本稿で取り上げた能の授業の成果としては次の四点にまとめる。

- ① 4時間目の授業の目標「能の音楽的な特徴の理解を広げるとともに、我が国に伝わる伝統音楽のよさや魅力について考えをまとめることができる」を達成できた。
- ② 生徒がICTを活用して調査や資料収集などを行い、成果物のリーフレットを制作することができた。
- ③ 日本の音楽文化や伝統の価値を認め、異なる音楽文化の価値や多様性への理解を深め、自文化としての伝統文化への愛着や誇りを感じとることができた。
- ④ 「知らない」ことがさらに見つかり、自文化として価値あるものだから「知りたい」「知る必要がある」が一層拡がり、生徒の文化的生活が豊かになり向上していくことを展望できた。

これらのことは、冒頭であげた第三の点を明らかにすることにつながるだけでなく、前稿で主に論じた第一、第二の点とも関わってくる。また、2であげた授業の三つのポイントとも重なる。

以上を踏まえて、音楽文化の理解・継承の視点から能の授業をつくるにあたり可能性として五点にまとめる。

- 生徒の実態や実感に合った継続的学習活動—生徒の知識や経験の延長にある学習活動を継続的に、年次ごとに積み重なっていくように計画する。
- 文化の継承と発信—日本の文化や伝統を自文化として受け継ぐ必要性への意識と、世界に向けて発信することの重要性への意識を高めるために、表現と鑑賞に基づく体験、自律的学習、アウトプットとしてのリーフレットづくりなどを学習活動に組み込む。
- 比較の視点の活用—西洋の音楽文化との比較、日本の伝統音楽・伝統芸能との比較、能の中での比較（例 同じ演目のクセとキリ、流派の違い、演者による違い等）を授業の活動に織り込む。

○ ICTの活用

○ オンラインによる能の体験、鑑賞、能楽師による指導など

今後の課題として、今回の成果を活かして新たな可能性も考えつつ、引き続き授業を実施し結果を検討し、新たな授業づくりに活かしていきたい。また、教員養成課程における授業づくりを展望することの示唆も得ていきたい。

注

- 1) 「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律」(平成6年(1994)法律第七号)

<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=406AC1000000107> (2021年9月5日アクセス)

2) 教育基本法(2006/12/22 施行)の前文には「我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」とあり、第二条「教育の目標」五には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と記されている。

教育基本法 https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html (2021年9月5日アクセス)。

改正前後の教育基本法の比較 https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf (2021年9月5日アクセス)

3) 横道は、能舞台の最大の特徴は「無装置・縦深・橋掛りの位置という三点にある」と述べ、「無装置であるがゆえに、無限の表現を可能にしていると言えよう」と述べている(横道 1987, p.61)。

引用・参考文献

- 池田哲之・上島まゆみ(2021)「伝統文化教育の課題と展望(Ⅰ)―鹿児島市立中学校における能教育の取組事例より―」『南九州地域科学研究所所報』第37巻, pp.11-22。
- 伊野義博:司会&提案者, 澤田篤子・藤田隆則・藤田加代:提案者, 水戸博道:指定討論者(2006)「プロジェクト研究2 日本音楽をどのように捉えたらいいのか―その1 場・伝える・身体―」『音楽教育学』第36巻第2号, pp.59-71。
- 小塩さとみ・大学みき子(2019)「教員養成大学における和楽器の指導に関する一考察―専門科目『和楽器』における箏と自主授業における三味線の取り組み―」『宮城教育大学紀要』第54巻, pp.215-229。
- 清村百合子(2015)「伝統音楽の授業づくり―伝統音楽の授業をどうつくるか―」小島律子編『音楽科 授業の理論と実践』あいに出版, pp.206-212。
- 桐山由香(2021)「伝統や文化を取り入れた音楽科授業の開発と検討―小学校第2学年の音楽づくりの実践事例を通して―」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第32号, pp.1-10。
- 久保田敏子・藤田隆則編(2008)『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。
- 小島律子・澤田篤子(1981)「日本音楽の伝統的学習方法―その特徴と学校音楽教育における現在の意義―」『大阪教育大学紀要』第I部門第30巻第1・2号, pp.15-32。
- 小島律子編著(2015a)『音楽科授業の理論と実践―生成の原理による授業の展開』あいに出版。
- 小島律子(2015b)『義務教育9年間の和楽器合奏プログラム』黎明書房。
- 玉村恭・荻野美智江(2017)「授業で能をどう扱うか―中学校での《羽衣》の授業実践から―」『上越教育大学研究紀要』第36巻第2号, pp.643-656。
- 中央教育審議会(2021)『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(答申)』https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (2021年3月20日アクセス)
- 柘植元一・塚田健一(1999)『はじめての世界音楽―諸民族の伝統音楽からポップスまで』音楽之友社。
- 中西紗織(2015)「教員養成課程における能の指導に関する研究―声と身体に焦点をあてた体験学習の意義と可能性」『全国大学音楽教育学会創立30周年記念誌(研究紀要第26号合併号)』pp.93-102。
- 中西紗織・齊藤貴文(2021)「中学校音楽科における能の授業(1)―『能って何?』への理解を深める授業実践の可能性」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第72巻第1号, 2021年8月刊行予定。
- 本多佐保美編著(2020)『日本音楽を学校でどう教えるか』開成出版。
- 三浦裕子(1998)『能・狂言の音楽入門』音楽之友社。
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』教育芸術社。
- 横道万里雄(1987)『岩波講座能・狂言Ⅳ 能の構造と技法』岩波書店。

付記:本研究は, JSPS科研費JP21K02482による助成を受けたものである。

(中西 紗織 釧路校准教授)

(齊藤 貴文 附属釧路義務教育学校教諭)